

最強のケアチームをつくる いろ葉の介護は365日が宝探し

中迎聡子著

円窓社 1980円

評・堀川 恵子 (ノンフィクション作家)

突然ですが、オムツ、はいたことありますか？
著者の介護施設では若者たちがオムツで1泊旅行に出かけます。その間、トイレには行かずオムツを使う約束です。我慢して我慢して初めてオムツに出す抵抗感、出してみても感じる心地の悪さ。自ら体験することで、オムツをはいた時にこそトイレに行くことが大事と分かるし、オムツ交換時に清拭が欠かせぬ理由も実感できるそう。

著者は20年前、老人施設の現状に落胆し、自ら介護事業所をたちあげ理想の介護を追い求めています。たとえばコロナ禍。施設で面会できないなら家へ連れて行く(医師が同行)。スタッフが陽性になれば、安心して陽性者を見るローテが組めると受けとめる。出発点は「コロナを中心に物事を考えないこと」。思い切って運動会を行うと、例年以上の大盛況。皆が楽しみを求めていたんだと気づいたといいます。

望む「逝き方」邪魔しない



こいほろと・えかえ・かむか・なかむか
1975年生まれ。老人ケアサービスなど「いろ葉」代表。

ピンチをチャンスに変える逆転の発想で、人材不足は嘆かず、ズブの素人さん大歓迎。無資格・未経験の若者たちとめざすのは流れ作業の介護でなく、相手の心の声を聴く柔軟なケア。車いすも安易に使いません。利用者に「ゴソゴソ違う」練習をしてもらい、自分で動ける範囲を広げます。介護とは「生きることを楽しむ」実験とも。

中古の救急車を買いました。運転資格をもつスタッフが出勤する先は病院ではありません。死期の迫る入所者に乗せ、万全の体制で自宅へ。希望どおり家で最期を迎えてもらうためです。

日々の「生き方」の延長線上に「逝き方」がある。過剰に酸素や点滴を使えば、体はむくむし呼吸もつらい。大事なものは、お年寄りの最期を邪魔しない引き算のケア。オギヤアと生まれ大切に見守られてきた命と、目の前で逝く命は同じ。施設で誰かが亡くなれば皆で風呂をわかし、家族と一緒に清めし、全員で見送ります。

介護にかかわる人、その予備軍にもぜひ読んでほしい目から鱗の二冊です。